

倉敷繊維加工

2026年名画カレンダー

54回目となる2026年の不織布名画カレンダーは日本における印象派の代表的画家、児島虎次郎の『ベゴニアの畠』です。

児島虎次郎は大原孫三郎の経済的支援を得て、大原美術館のコレクションの礎を築いた人物でもあります。若くして才能を認められヨーロッパ留学のチャンスをつかんだ児島。ベルギーのゲントで画家エミール・クラウスに師事し、色鮮やかで光りまばゆい画風を学んでいきます。

1910年に描かれたこの『ベゴニアの畠』は、明るさと柔らかさに溢れ、見る側の気持ちも温かくなるような作品です。

今春には記念館もオープンした話題の画家の作品をカレンダーでお手元にお届けいたします。ご興味のある方はぜひご検討ください。100枚より名人れ注文を賜っております。ご注文よろしくお願いたします。

(倉敷繊維加工)生活資材課

泉谷 致香子 記



2026



倉敷繊維加工株式会社

KURASHIKI TEXTILE MANUFACTURING CO., LTD.

▲ 2026年 名画カレンダー「ベゴニアの畠」(児島虎次郎)

岡山県川上郡下原村(現在の高梁市成羽町)に生まれた児島虎次郎は、幼い頃から画才に恵まれ、1902年に東京美術学校西洋画科選科に入学します。研究科在学中の1907年、東京府勸業博覧会美術展に出品した『ななけの庭』が西洋画部門で一等賞を受け、加えて作品は宮内省の買い上げとなります。この快挙を喜んだ孫三郎の勧めを受け、児島は翌年留学のためヨーロッパへと渡りました。

フランスを訪れた児島は、到着当初はパリ郊外のグレの村に滞在し、風景画制作などを行います。滞欧2年目からはベルギーのゲントに移り住み、その後同地の美術学校で学びます。当時のベルギーの美術界では、印象派とその後発展した新印象派がほぼ時を同じくしてフランスから紹介されたことで、それらが緩やかに混ざり合いながら受容され、色斑によって光を捉えて画面を覆う、リュミニスム(光輝主義)と呼ばれる新印象派風のイメージを生み出していました。野外で風景描写の研鑽を積んだグレにおける1年間を経て、日本で身に着けた描写スタイルから脱却しつつあった児島は、ゲントで学びながらリュミニスムを先導した画家エミール・クラウスに師事します。リュミニスムを吸収し、光を捉えた明るい画面と、それ自身が表現力を備えた力強い筆致を得て、児島は元来備えていた光や色彩の表現に対する感覚をさらに開花させることとなります。

さて本作は、児島がゲントに移り住んだ1910年に描かれた作品です。画面上部に広がる緑樹、陽光と影が生み出す光の模様が色調の対比を強調し、明らかに輝く空気そのものが描き出されているかのようです。ゲントを訪れ、以降1929年に若くして没するまで、光に満ちたイメージを展開させ続けた児島。本作はその萌芽期にあたると言える作品です。

「カレンダー」解説文より抜粋

**10人の気持ちが
100人の笑顔に。**

清掃活動参加者10人ごとに
L∞PLUSタオルハンカチを
100枚寄贈します。

2025年
1月～8月の
参加者は
累計 **505人**

**寄贈枚数は
5000枚**
となりました!

来月もご協力
お願いします!

10・100プロジェクト
10・100プロジェクト実行委員会
(人事部・総務部・倉敷繊維加工株式会社)